

衝動で書いたSSを投稿
しようと思う

河江ケイ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

DD原作持つてなくて書けなかった…

詳しくは活動報告にて

※取り敢えずg d g d

※s sでしか流れを知らない

※取り敢えずにわか

※作者の妄想ぶち込み

※本当ににわかだからこそ行われるえげつない行為

批判はなるべくオブラートにお包み下さい。でないと、作者が死にます。

上記をお読みになった方で、良いだろう読んでやる、と言う強者の読者様はお進みください。許容できない方は直ぐにブラウザバックすることをオススメ致します。

「作者の暇潰し程度に書いて投稿します。読者の方も本当に暇なときに『すること無いし、読んでやるか』と、過度な期待はせずに読んで頂けると幸いです。

また、暇つぶしに書いていく作品たちなので、「消せ」に準ずるコメントが書き込まれました場合、即刻削除させて頂きます。

ご容赦の程よろしくお願い申し上げます。

目次

おまけ

ハイスクールD×D編 気付いたらU

A10'000突破記念 | 1

不死鳥の兄はどうやら規格外のようです

ぷろろーぐ | 9

特訓やるってさ | 13

明日ゲームするってよ | 18

ゲーム決着とその後 | 23

エンカウント | 27

おまけ

ハイスクールD×D編 気付いたらUA10,000突破記念

フリード「ヒヤハハハハ、UA一万突破記念、始まるぜえ〜？」

レイス「…うざいな」

黒歌「うざいね」

ヴァーリィ「そうだね」

フリード「あれっ？皆俺たちの扱い酷くないですかね？」

子猫「いつもの事ですね」

フリード「ひどいつ、せっかく盛り上げようと頑張ったのにつ！僕ちんの努力を返し

てくれよ、兄貴い」アシニシガミツク

レイス「あー、ドンマイ？いや、悪かった、か？」

セラフォルー「汚い手でレイスくんに触らないで」ケリツ

フリード「イタイツ！…ヌググ、セラちゃん酷くないですかねえ？」

子猫「いつもの事です」（2回目）

子猫「それより、今回何やりますか？」

レイス「んー、特に決めてないな：おーい、作者ー」

SA☆KU☆SYA☆ シュタツ「お呼びかな、レイス君？」

レイス「ああ、今回は何すりやあ良いのかなって」

作者「んー、特に決めてない：ハッ、王様ゲームなんてどう？」

レイス「別に良いが：（その拙い文章力で）大丈夫か？」

作者「大丈夫だ、問☆題☆☆ない、問題しか無い」

レイス「いや、どっちだよ：」

作者「ま、取り敢えずやってくればいいさ。後は任せておいてくれ！」

レイス「あー、作者やる気が空回りするタイプだから終わったな：まあいい、じゃあ

王様ゲームするか」

場所移動中

サーゼクス「さて、始めました王様ゲーム！司会のサーゼクスと！」ノリノリ

アザゼル「あー、本作ではあまり出番が無い予定だから、多分番外編に引つ張りだこ

にされるであろう、解説の墮天使総帥アザゼルだ。よろしく」

サーゼクス「さあ、参加者の紹介をしようか！

先ずは我らが主人公！話が進むたびに主に作者のせい、キャラが掴めなくなっているレイス・フェニックスウ〜！

レイス「大丈夫か？サーゼクス…」

次は本作では無駄にハイスベックになった、原作19巻の後書きにて復活フラグが立ったらしいエクソシスト！フリード・セルゼン〜！

フリード「ヒヤハハ、そう言うノリ、嫌いじゃねえぜ？あ、よろしくだっちゃ」

その次は作者が最も書くのがしんどかったと言っており、黒猫の黒歌あ〜！

えっと、作者は語尾に『にゃ』を付けるか否かで小一時間ほど悩んだと言ってます！！

黒歌「そんなことで悩んでたのね…よろしくにゃ？こ、こんな感じでいいのかにゃ？

／／／

はい、だいぶしんどくなってきましたので、後はさつと終わらせたいと思います！」

と、言う事で参加者はこちら。

レイス・フェニックス、フリード・セルゼン、黒歌、

子猫（白音）、セラフォル・レヴィアタン、

リアス・グレモリー

作者の独断と偏見で、この6人に確定しました！

(作者が) しんどいので、3回だけやります。

テレレテツテテ、サイコロー!

サーゼクス「さて、ルールの説明をしましょう。

レイスを1とし、セラフォルが2、フリード3、リアス4、黒歌5、子猫6

として、5回サイコロを振る。最初に出た数が王、二番目三番目の数に命令する、4、

5番目の数字がキャラ指定と言ったやり方で行きます。

それでは……

第一回戦、はじめっ!

『『王様だーれだー!』』

レイス「ほう、俺か……」

レイス「ならば5番が2番を10秒撫でる」

サーゼクス「はいっ、2番と5番拳手っ!」

フリード「5番は僕ちんですね」

黒歌「ゲツ……2番、は、私……」

レイス「はい、ではスタート」

フリード「きひっ、おーヨシヨシwwww」

黒歌「くつ、微妙に撫でるのが上手いのが腹立つ……!」

アザゼル「フリードは撫でるのが上手いのか…何故に?」

リアス「えっ? ナニコレ、カンペ? えっと、喋らないまま終わる可能性があるから、喋っとけ? ……、わ、わー、たのしそーだなー(棒)」

レイス「はい、しゅーりよー。じゃ、次行きますか」

サーゼクス「それでは次のゲームに移ります!」

2回目『『王様だーれだ!』』

黒歌「はーい、私でーす」

黒歌「それじゃあ、3番のいいところを6番が一つ挙げる!」

サーゼクス「それでは3番と6番名乗り出てください」

フリード「あり、また俺っち3番じゃん…」

リアス「うええっ!? フリードの良いところ!? う、ううくん……………何時も巫山戯てるけど、強いし意外としっかりしてて、おにーちゃんを支えてくれているところ…とか? / / /」

アザゼル「あらまあ、ここでもレイス関連とは…。フリード救われねえなあ」

フリード「結局兄貴中心なのね…。まあ、ありがとだつちや」

リアス「つ、次行きましょ!!」

サーゼクス「次がラストになります!!」

最後『『王様だーれだ!』』

リアス「私ね」

リアス「6番が…1番を『ご主人様』と一回呼ぶ、と言うのはどうかしら」

サーゼクス「6番が1番を『ご主人様』と一回呼ぶ!さあ、6番と1番は名乗り出てください!」

子猫「6番は私です。1番は…」

レイス「ほい、俺だ」

子猫「先輩…何故このタイミングで?」

レイス「いや、引いちゃったモンは仕方ねえだろ…」

子猫「むう…」

サーゼクス「それじゃあ、お願いしま〜す!」

子猫「はあ…せ、先輩、行きますよつ…」

レイス「あ、ああ、こいつ…!」

子猫「ご、ご主人様…？／／／」

『くほはっ!?!』

その余りの破壊力に、フリードと、アザゼル、リアス、そして白音本人以外は気絶した。

ヴァーリ「おや、終わったかい？忘れ去られていたヴァーリが、回収に来たよ。さ、彼らを連れて行こうか」

ヴァーリ「次は僕も忘れ去られずに参加できるといいなあ…。よろしく頼むよ、さ
くしやくくん？」

作者「了解であります!!!」

不死鳥の兄はどうやら規格外のようです

ぶろろーぐ

「——待ってくれ、兄者！」

背後から弟のライザー・フェニックスの自分を呼び止める声が聞こえた。

「何だ？ライザー。俺は忙しい、こんな場所で油を売っている暇は無いのだが？」

自分でもちよつとびっくりするくらい低く、冷たい声が出た。

「ッ……兄者は変わったよな……」

「そうか？自分ではよくわからんのだが。別に変わった訳では無いと思うが？」

「いや、兄者は、あんたは変わった：ッ昔はあんなにも家のことを考えて、俺もあんたが家を継ぐことに反対は無かった！あんたが家を継げば、フェニックス家は安泰だと思った！！あんたは容姿も良いし、頭も良い。他人にも優しく、内面も外面も格好良かった！あんたは俺の憧れだった！なのに……なのに、なんでっ——そんなに変わっちゃったんだよ兄者……」

「……………」

「妹も……レイヴェルだって、あんたを慕ってたんだ！あんたのように立派な悪魔になり

たいって！俺もレイヴェルも目指すところは一緒だった!!追いかけてたのはいつだって兄者…あんたの背中なんだよ。だから頼むよ…俺達の前から居なくならないでくれよお……」

「……………」

それは、兄の背中を追い続けた弟の、妹の分の願いまで乗せた懇願。純粹な願い。全てを話してしまいたい。そんなに衝動に駆られる。けど、それは出来ない。

自分が居れば、弟たちの為にはならない。自分は弟たちの為なら、何でもしてしまうから。あまりここに長く留まる訳にはいかない。必死に取り繕った仮面が剥がれてしまうから。

「お前も話は聞いた筈だ。俺は自由に生きたい。暫く旅に出るだけだ、何時かはわからんが、いずれ帰ってくる。それまでレイヴェルの事は頼んだぞ」

そう言つてその場から立ち去る。背後から、任せといてくれ、兄者！と元氣良く叫ぶライザーの声がした——と、言うのが俺、レイス・フェニックスこと、せきえんれいすい赤炎冷水の記憶で三〇〇年ほど前。

今俺は、駒王町にある駒王学園で、高校3年生をやっている。

最近実家（フェニックス家）から使い魔が来て、グレモリー家と関わりが深くなって、親密になったから駒王町を管理しているグレモリー家の娘、リアス・グレモリーの手伝

いを『正体がバレないように』やれとのこと。

何ができるのん？ってなったから、仕方なくはぐれ悪魔とかこつそり討伐してる。まあ、毎回俺が先にはぐれ悪魔を倒しちゃうから、グレモリーは若干ピリピリしてる。

そんな感じで生活してたら、また使い魔が来た。

「はっ。」

もう、なんと言うか……。内容はこう。

〈グレモリー卿と酒飲んでたら、気分が良くなつてライザーと、リアス・グレモリーの結婚の話になった。自分がちよつと余計なことを言ったから、ライザーが変なやる気出して暴走した。悪いけど、尻拭いをお願いしたい所存〉

ね？なんて言えば良いか……。

そうそう、なんか知らないけど、俺死んだことになつてたんだけど。確か、えくそしすど？とか言うのと家を出て一年くらいした頃に戦つて、腕一本持つてかれて、その後にそいつの全力の一撃を受けて消し飛びました。

何故生きてるかって？あれだ、フェニックスの名は伊達じゃないって事だな☆

んで、ソイツがフェニックスの兄を倒したって周りに言いふらして、色んな調査の元生きてる確率は低いって結論付けられた感じ。フェニックス舐めんな。

あ、因みに俺が生きてる事を知ってるのは、魔王様と両親だけである。死んだことに

しとけば、完璧に自由じゃね!?!とか考えて、のんびり旅してたら偶然魔王様とエンカしました。物凄く怖かったです。

そのまま両親の所へ連れてかれて、事情を説明。そして俺は自由の身となりました! ……暗部的な立ち位置になることを条件に。

簡単な話、自由に旅をすれば良い。生きてる事も言いふらさない。けど、偶に使い魔を超越して依頼を出すから、それだけはしっかりこなせ。ってな感じ。

かなり話はズレたけど、取り敢えず親父殿の尻を拭う為に、動き出しますかね…。

特訓やるってさ

駒王学園。元女子校であり、二年前に共学化した。そのこの2大お姉様と呼ばれるのが、3年生のリアス・グレモリーと、姫島朱乃である。

2年生で有名なのは、木場祐斗と、兵藤一誠であり、木場はイケメンで、女子に物凄く人気がある。兵藤は……うん、まあ、欲望に忠実なのは悪くないと思うよ？ただ、自重が必要だと思います。

1年では、塔城子猫と呼ばれる子で、駒王学園のマスコットの存在である。

それと、生徒会。生徒会以外のメンバーは、リアス・グレモリーの眷属であり、オカルト研究部と言う名で旧校舎にて活動している。また、生徒会は、会長の支取蒼那ことソーナ・シトリーの眷属だ。

この2つに言えることは、美男美女ばかりだと言うこと。兵藤も黙ってればイケメンです、はい。それと、俺の護衛対象だと言うこと。ゆーて、何もしてへんのですけどね。はい、真面目にやります。

取り敢えず、ライザーを止めればいいのかな？

「いや、君には他にやってもらいたいことがあるんだ」

「……げっ」

そこには…赤髪のイ☆ケ☆メ☆ン☆魔王様が立って居られた…。

「むっ、『げっ』とは失礼だね。僕と君の仲じゃないか、そんなに嫌そうな顔をされると、僕だって少し傷つくんだけどなあ…」

「…悪かったつて。で、魔王様直々に出向いて、俺に何のようだ？」

「何、君には……ほら」

「何だこれ？」

魔王様が俺に渡してきたのは、黒い布と、謎の仮面。

「何だこれ？」 大事なことなので、2回聞きます。

「仮面とローブだよ？」

違います、そういうことが聞きたいんじゃないやありません。

「そういう事ではなく、これをどうするのか、と聞いているのだが？」

「君が着けるのさ」

「………は？」

「君が着けるんだ。一応君はまだ死んでいる扱いだろう？だから、今の状況で素顔を晒すのは得策じゃ無い。だから仮面とローブで顔を隠して、リア達を鍛えてもらう」

「(絶句)」

詳しく話を聞くと、

ライザーがリアス達とレーティングゲームをする。

人数も経験もライザーの方が上。

「10日の猶予をやるう」

やる気のリアス達。

が、問題が一つ。「特訓を見てくれる先生どうしよう」

兄の魔王が、「とても強い良い先生を知ってる」

妹に弱い魔王、失言に気付く。

強い（笑）のレイスの元へ。

尻拭いして下さい↑今ここ

「馬鹿なのか？」

「ひどいっ！……可愛い妹の為なら何だってやって上げたくなる………だろう？」

わからなくは無いが「黙れシスコン」

「辛辣ウ！でも一瞬へわからなくも無い」って顔してたね、レイス」

まあ、俺だつてレイヴェルが同じ状況にあつたら、同じことをしてあげ………ん？俺自

身が出張ったほうが早くないか？………まあいい。同じことをしていた自信がある

………と、思う

で、暫くグダグダ二人で駄弁った後、日場所を聞いて、引き受けておいた。(特訓は明日かららしい)

今ふと思いい出したんだけど、グレモリー卿ってお酒飲まないよね…? うん、飲むのはサーゼクスだけだ。

…あれ?もしかしてあいつ……………

「バカヤロー!」

叫んだ声は、森に反響して消えた。

クツソ、明日からバレないようにしねえとな…。

オリ主設定

名前：レイス・フェニックス

性別：男

身長：184cm

体重：76kg

容姿：金髪に鋭い眼光！（野獣じゃないよ）体はかなり筋肉質で、端的に言うなら、ライザーを超イケメンにしただけ。

性格：話し方と思考での言葉の使い方や、テンションがかなり違う。外側と内側の差が激しい。

冷たい見た目に反して、かなり優しく他人にも甘い。

ブラコンでありシスコン。

自分の事をかなり下に見る傾向がある。

本作の原作との違い

ライザー：性格がイケメン。しかし、思い込みが激しくなっている為、結婚の話で暴走。本作ではフェニックス編が終つてからもかなりの頻度で登場する予定。

サーゼクス：レイスとは腐れ縁。レイスと妹について語り合っていた為、原作よりシスコン。レイスにはカリスマ以外勝てていない。密かにリアスとレイスを結婚させて、レイスを魔王にする計画を立てている。

腕を持つてったエクソシスト：既に人間辞めてる。みんな大好き、あの人です。レイスの腕を食つたから、不老不死（笑）になった。死なないよー

レイヴェル：可愛い（元々）

明日ゲームするってよ

さて、今日からリアス・グレモリーの眷属たちの特訓に付き合うわけだ。その為に公欠届けを一ヶ月分出してきました。

何故一ヶ月分かって？色々やらなければならぬ事があるんです、ハイ。

しかし、リアス・グレモリーの眷属たちはすごいと思う。兄の知人であると言う説明はあったものの、変な仮面を着けたフード付きローブの人物を信用したりはしない。

けど、こいつ等は直ぐに信用した。危機感が無いのか、サーゼクスへの信頼が強いのか。……後者はないな、うん。

ま、取り敢えずリアス・グレモリーたちと合流できた訳だ。

「よろしくお願ひします、パールさん！俺を強くして下さい!!」

「ハハッ、それは君の努力次第かな」

ああ、いつもこれだったらいケメンでモテるだろうになあ、兵藤くん。あ、俺今へパールって名乗ってまゝす。

「よ、よろしくお願ひ……します……」

「ああ、よろしく頼むよ」

兵藤くんの後ろに隠れながら、今にも消え入りそうな声で挨拶してくるのが、アーシア・アルジェントさん。彼女は元シスターで、リアス・グレモリー眷属の新入りらしい。聞いてないぞ、サーゼクスウウウウ!

「はじめまして。リアス・グレモリー様の騎士をしております、木場裕斗と言います。少しの間ですが、よろしくお願いします」

「これはこれは。どうもご丁寧にな。こちらこそ、少しの間だけど、よろしく頼むよ」

ごめんネ、木場くん。実際にははじめましてでも、少しの間でも無いんだ。

「よろしくお願いします………本当なら今頃、怜水先輩とケーキバイキングに行けたのに……」

「……暫くの間、よろしくね」

ごめんね、本当にごめんね子猫ちゃん。と、いうかケーキバイキングに対する熱が違う……。

「よろしくおねがい……あら?」

「!?ど、どうかしたい?」

ヤヴァイ、姫島は本当にヤヴァイ。

「うふふ……いえ、何でもありませんよ。よろしくお願いしますね」

「あ、ああ。よろしく」

こいつは苦手だ。ドSだから。学校でも席が近い俺を虐めて楽しんでる節がある。

「よろしく頼むわ。兄の知り合いだって話だから、頼りにしてるわよ」

「ああ、期待に添えるよう頑張らせて頂こう」

それから10日間はあつという間だった。

体力作りから始まり、各自に課題を与えて、5日で伸ばせるだけ長所を伸ばして貰った。

残りの5日は短所を補うための訓練に費やし、訓練期間は終わった。

明日は遂にライザーとの決戦である。自分が鍛えたりアス・グレモリーの眷属と、自分の弟のレーティングゲーム。

どちらが勝つてもおかしくはない。さて、どちらが勝つのだろうか？

黒いあいつ『♪、あの子が何処まで強くなってるか、楽しみだにや』

ヤヴァイ奴『キヒツ、やつこさんにも気になる子ができたんですか？』

黒いあいつ『ちがーうつ私はご主人様一筋なのつ、気になるのは妹の成長なのつ！』

ヤヴァイ奴 『あつ、ちよ、まっせ…イタイっ!』

白いやつ 『…久しぶりに顔を出したら、なんなんだい?この状況…』

ヤヴァイ奴 『おつ、久しぶりイ!助けてくれると嬉しいなごおっ!』

白いやつ 『たぶん、君が余計なことを言ったんだろう?自業自得さ、諦めてくれ』

あつ、またあいつ等がなにかやってる気がする…。

本作と原作の違い 2

リアス・グレモリー：レイスのことが気になっている。兄の友人と言う事で、何度か家に来たときに顔を合わせている。

塔城子猫：可愛い。読めばわかるはずです。惚れてるのが。怜水は、鈍感キャラで通している為、レイスも段々鈍感になって来ている。

兵藤一誠：段々只のイケメンになっている。主に作者のせい。

黒衣着物のあいつ：SSでありがちな助けられたパターン。レイス君にベタ惚れ。

白いあの子：主人公補正も持ち合わせたら間違いなく只のチーターになるであろうあいつ。

ヤヴァイ奴：前話に登場した腕を持つてったエクソシストと同一人物。あの頃はレイスもあまり強くなく、このヤヴァイエセエクソシストが強敵だった。

ゲーム決着とその後

レーティングゲームが終わった。やはり、経験と人数の差は十日では埋められなかったようだ。

このゲームは、ライザーが勝つたらしい。らしい、と言うのは、俺はそのゲームを最後まで見ることができなかったからだ。

彼が今居るのは、レーティングゲームが行われた駒王学園…の、様子が観られる魔界のとある一室。今そこには、レイスしか居らず…この部屋の主だった者たちであろう死体が彼の周りに転がっている。

「…はあ、仕方ねえよな、反逆しようとした挙句、人の弟まで利用しようとしたんだ。証拠もあるし、直ぐにお仲間も同じ場所に送ってやる」

何故、こうなったのか。それは数分前まで遡る…

——数分前——

とある一室にて…

「ふっ、ライザーもちよろいものよなあ、少し焚き付けただけでこうもあっさり動いてくれるとは…」

「ははは、本当にそうですなあ。兄とは大違いじゃ」

「ライザーがリアス・グレモリーに勝てば、後はライザーを裏から操るだけじゃ。それで魔界が手に入るとは…楽なものよな、ハッハッハ」

この部屋には、数人の老人がレーティングゲームの中継を見ながら、今後のことについて語り合っていた。

この一室は、魔王すら知らない場所にある。バレる筈が無いと、彼等は油断していた。彼らの誰もが、3大勢力が戦争していた時代の生き残り。所謂猛者である。

老いたとはいえ、そこらの悪魔に負ける事はさらさら無い。だからこそ、油断した。油断していたからこそ、この部屋の人数が一人増えている事に気付く事はなかった。

部屋の隅、ドアとは真逆、彼らの後ろから声が聞こえる。

「へえ、ライザーの暴走は、あんたらのせいだったのか。そんであんたたちはライザーを裏から操って魔界の政権を握ろうと…」

「っ！誰だ!!」

彼等は後ろを振り返り、胡散臭い仮面の男を発見する。

「なっ、貴様! どうやってここを!!」

「何だ貴様ら? 本当に魔王がこの場所を知らなかったと思っているのか? 知らないフリをしていただけに決まっているだろう? 反逆者を泳がせる為にな」

このままでは不味いと感じた一人が、己の獲物を手に仮面の男に飛びかかる。彼が持つ獲物は、呪われた武器。悪魔が悪魔を殺す為に創られた剣。例え、どんな悪魔でも殺してしまうが故に、封印されていた剣である。その封印を解いてまで持ち出したのだ、効果がなくては困る。

鮮血が飛び散り、首と胴が離れ、首が床へと落ちる。が、飛び散った血液諸共持ち主の元へ戻ってゆく。

「なっ!?!」

その再生は、まるで不死鳥のようで…

「さて、では自己紹介をさせて頂こう」

そう言い、仮面の男は仮面を外す。

「暗夜部隊隊長をしております、元フェニックス家継承権第一位——レイス・フェニックスにごさいます。今宵は私があなた達を丁重におもてなします——なんて、形式張ったことあやらなくても良かったかな?」

「糞&……」

先程の男が、もう一度切りつけようとすると、レイスが回し蹴りを放つ。その蹴りは何よりも洗礼されており、綺麗だった。

「それ、痛かったんだよ…そう何度も食らうかってんだ」

回し蹴りだけで上半身と下半身がおさらばした悪魔は、その場で息絶える。それを見て、逃げようとする悪魔に手刀が、蹴りが、突き刺さる。

それだけで、首が落ち、心の臓が潰され：数分後には、その場で動くのはレイスだけとなっていた。

——これが、数分前に起こった出来事です、ハイ。

さて、行くか…

ガチャツ

と、ドアを開けると、そこには……

「は?！」

「へ?！」

セラフオール・レヴィアタン、魔王②が居た。

エンカウト

扉を開けると、魔法少女風の服装をした少女が居た。

四人いる魔王の中の一人、セラフォル・レヴィアタンである。

そして自分は今、彼女の前に正座している。いや、させられていると言ったほうが正しいか。

「で、君は何故ここに居たのかな、レイスクン？」

「……いえ、何故か、と問われましたも……」

「キミ、死んだ筈だよ？なのにとどしてここに居るのかなあ？」

取り敢えず、笑顔で話すセラフォルが怖いです。目だけ笑って無いんですよ、ハイ。

「それに、生きてたならなんで顔を見せなかったの？私、凄く悲しかったんだよ？」

「あのですね、死んだことにしとけば、尾行も無くなって自由に旅できるかなあつて……」

「ばっかじゃないの!?!だいたい、レイスクンはいつもいつも——

——」
小一時間ほど、セラフォルのお説教を喰らった。セラフォルが途中で泣き出し、ずっと正座なので足の痺れが凄かったりと、色々あったが……

「えへへ、レイスクうくん」

セラフオルーが、胸に顔を擦り寄せてくる。頭を撫でてやると、えへへと恥ずかしがりながら、頬を染める。可愛い。

けど、撫でられるのって恥ずかしいよね。そう思い撫でるのを辞めると、セラフオルーが小さくあつ、と声を出した気がした。

「…そろそろサーゼクスのもとに行かなきゃならん。すまん」

取り敢えずあいつをばなきやいかん。あいつ他の魔王に、俺が生きてる事黙ってたらしいからな…。

まあ、魔王同士なら、情報交換を出来てるだろうと、確認を怠った俺も悪いのだが。

もし、セラフオルーじゃなくて、アジュカとかにこの状況で出くわしてたら、どうするつもりだったんだろ？

最悪、俺ははぐれ悪魔認定、サーゼクスも魔王から降ろされていたかも知れない。

そう考えると、やっぱりあいつとはOHANASHIしなきゃならん。

と、言う訳でやって来ましたサーゼクスの元へ。今回は、お供としてセラフオルー様が来ております。

「や☆あ、サーゼクス」

「サーゼクスちゃん、遊びに来たよ☆」

「……………」

「おいおい、どうしたんだいサーゼクスくん。そんなに顔を引き曇らせて」

「レイスクン、そこに居るのはセラフオールかい？」

「サーゼクス、お前は何を言ってるんだ？」

「ははは、そうだよね、彼女がこんな場所に居る訳…「どっからどう見てもセラフオール本人だろ？」…ですよねえ！」

「さて、サーゼクスちゃん。少しお話したいことが有るんだけど、いいよね☆」

「生憎だけど、僕は少し忙しくてね…」

「ふーん、そう。わかったよ☆」

「そうか、分かってくれたか！それじゃあ帰つて…「グレイファイアちゃん、ちよつといかなあ〜？」…何を叫んでるんだい!？」

その後、サーゼクスはセラフオールに連行された。それから、一時間ほど俺はグレイファイアと話していた。

その間に、なんか叫び声が聞こえた気がしたけど、俺はグレイファイアと話してたからそんなことは知らない。しらつたら知らない。

俺のOHANASHIは、翌日にうつしてあげた。